



①②③自社ブランド「カナサカ」の商品（写真は箸置きとコースター、カトラリーレスト）／④木工と組み合わせて製作したオリジナルカウンターテーブルとイス

“墨田”の高い技術力を発信し、 「墨田のものづくり」を未来へとつなぐ

一社依存からの脱却

株式会社 協栄医科工業

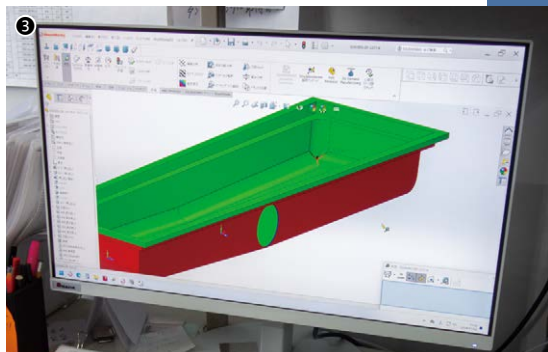
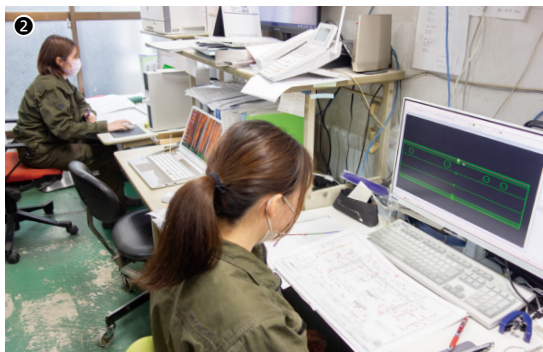
耳鼻咽喉科用機械器具の製造業としてスタート

㈱協栄医科工業は1947年、徳永武志社長の祖父・徳永啓人氏が、江戸川区平井の発注元の倉庫を借りて耳鼻咽喉科用機械器具の製造業としてスタートした。1949年に墨田区横川3丁目へ移転。1959年に協栄医科工業㈱として法人化。それとともに、墨田区東墨田2丁目に第二工場を開設した。1969年に現在地に本社工場を建設、移転した。

1982年には株式改組するとともに、創業者の啓人氏が会長、父の徳永清氏が2代目社長に就任、耳鼻咽喉科用機械

器具を製造し続けた。1983年からは発注元で製造する厨房機器の製造も開始。その後、運動機器、電熱機器などの仕事も受注するようになった。1990年にはアマダのパンチ・レーザ複合マシンAPELIO-255を導入した。1991年には現在の社屋と工場が完成する。それにともない、病院や各種飲食業で使用される適温配膳車、テーマパーク設備の仕事を受注するようになり、得意先は徐々に増えていった。

2008年2代目社長の死去にともない、母の徳永恵美氏が3代目社長となった。



① 徳永武志社長／② 2台のSheetWorksは専門学校出身の女性社員2名が操作する／③ SheetWorksで作成したグリーストラップの3次元モデル

4代目社長就任の経緯

徳永武志社長は4人兄弟の末っ子として生まれた。長男はホテルマンとなり、次男・三男は会社に入り両親を支えて製造現場で働き、溶接工としての腕を磨いた。一方で、徳永社長は音楽や調理が好きで、音楽業界ではラッパーやDJとして活躍した。また、料理人として調理師資格も取得、いつかオーナーシェフになろうと志していた。

父親の急逝で、暫定的に母親が3代目社長に就任したものの、先々の事業承継をどうするか、そのための後継者を誰にするか家族会議が開かれた。長兄はホテルマンとして責任ある立場におり、会社に戻る意思はなかった。そして次男、三男は「職人として、引き続きものづくりに専任したい」と後継者になることを拒んだ。その結果、フリーな立場でさまざまな業界を経験してきた、末っ子の徳永社長が後継者になることに決まった。

「DJや料理人といった仕事をやりたいという思いもありましたが、祖父、父、母と3代にわたって継続してきた家業を止めるという選択肢は私にはありませんでした。もともと、ものづくりは嫌いではなく、祖父や祖母、両親が働く後ろ姿を見て育ってきたので、兄たちの協力を得ながら、自分が事業承継者として4代目を継ぐことを決意。2012年9月に当社に入社しました」(徳永社長)。

一社依存体質からの転換

「しかし、入社してみると大変なことがわかってきました。創業以来、継続取引を続けてきた耳鼻咽喉科用機械器具の仕事の売上比が大きく、1社のみに依存した状況になっていたのです。この状況に危機感を抱き、なんとか脱却できないかと考えました。また、兄を含め、当社の作業者が培ってきた技能・技術の価値が正当に評価されているとは思えませんでした。営業をしながら、当社のような町工場が培ってきた技術の価値をどのように認めてもらい、価値を高めていく

かを考えました」(徳永社長)。

ものづくりを未来へとつなげたい

そして、2020年10月に4代目社長に就任した徳永社長は自社のWebサイトの中で「モノづくりを未来へと繋げたい。時代の変化と共に、町工場も変わらなければならない。ただ、変わらないモノがある。それはモノづくり職人としての力と誇り、そして人との繋がりと信じています。私の少年時代の記憶では、町はもっと活気があり、工場も活発に動いていた記憶があります。今、町工場が衰退していく中、自分達の代ができるベストを尽くし、地域の方々と協存し、日本のモノづくりを次の世代へと繋ぎ、社会貢献をしていきます。協栄医科工業はお客様に感動を、従業員とその家族には夢と幸せを与えられる企業を目標に前進します」という力強いメッセージ

会社情報

会社名	株式会社 協栄医科工業
代表取締役	徳永 武志
所在地	東京都墨田区東墨田2-26-8
電話	03-3612-3808
設立	1959年 (1947年創業)
従業員数	23名
主要事業	精密板金加工、各種金属レーザー加工、金属溶接加工、金属研磨加工、組立
URL	https://kyoei-ika.co.jp/



CORPORATE WEBSITE

主要設備

●レーザーマシン：LC-1212αV ●ベンディングマシン：EGB-6020e、HD-1303NT、RG-50、RG-80 ●シャーリングマシン：M-2545 ●コーナーシャー：CSH-220、CSW-220
 セットプレス：SP-15、SPH-30 ●ハンディファイバーレーザー溶接機：FLW-1500MT ●3次元ソリッド板金CAD：SheetWorks×2台 ●2次元CAD/CAM：AP100 ●生産管理システム



①レーザマシンLC-1212α V／②ベンディングマシンEGB-6020e／③溶接工程ではTIG、半自動、ファイバーレーザ溶接に9名の社員が対応している

ジを綴っている。

経営理念も『『墨田のものづくり』、魅せる伝統技術を地域社会と共に、協存の心で未来へと物語を繋ぐ』とした。

「地域の方々と私たち職人が協存してつくり出したものを、世に提示し続けることが、私たち『協栄医科工業』の使命であり誇りです。ものづくりとは人がものをつくり、ものが人から人へ渡り、人が人へものを伝えること。ものが人と人をつなぐ絆をつくり、その絆が伝播することで円となり、そしてご縁につながることを私たちは決して忘れてはなりません。ものづくりの事業と技術は人から人へ、過去から現在、そして未来へと継承され、職人たちが職人たちの物語をバトンのようにつないできました。職人たちの命が吹き込まれ、年輪が刻まれ続ける道具や機械を大事に使い、ものをつくり出し、大切な人に喜びと感動を提供していきたい。これこそ、ものづくり職人の冥利です」(徳永社長)。

工場2階の事務所エリアを社員全員で改装

改革を進めていく中で、まず1991年に建てられた工場2階の、以前は祖父母の住まいとなっていた居住スペースをアトリエのような事務所に一新した。音楽が流れる落ち着いたある事務所は、墨田区内のデザイン事務所が内装デザインを行い、施工は社員全員で行った。カウンターテーブルとイスは、女性社員がイチからデザインして製作。工場設備には東京都の補助金などを活用して、2024年6月に最新のベンディングマシンEGB-6020e、9月にハンディファイバーレーザ溶接機FLW-1500MTを導入した。

「当社には80代の現役溶接工をはじめ、4月に専門学校を卒業して入社したばかりの22歳の女性の溶接工もいます。社員20名のうち9名が溶接作業者です。耳鼻咽喉科用機械器具や厨房機器としてはSUS304、SUS430の板厚1.8～3.0mmの材料をレーザ加工、曲げ加工して、溶接・仕上げ、組

立し納品する製品が多いです」。

「医療機器は主に医療用ユニットフレーム、デスク、ラック、バット、エアータンクやユニットパーツ。厨房機器は排水ユニット、タンク、グリーストラップ、調理シンク、調理台、キッチン収納などで、最近は業務用厨房のグリーストラップの仕事が多くなっています。グリーストラップは、油脂や残飯、野菜くずなどが直接下水などに流出することを防ぐため、業務用厨房において設置が義務付けられている装置で、現在は大手外食チェーン向けのまとまった案件を受注していて忙しい。業務用厨房の仕事では中板の縞鋼板などを排水ユニットに使うので、当社の設備では加工できず、寸法切りされた縞鋼板を支給してもらい、当社で加工した板金部品を溶接、組立します。先頭工程のレーザマシンがLC-1212α Vのみのため、加工が追い付いていません。できればファイバーレーザ複合マシンの増設を考えたい」(徳永社長)。

一社依存からの脱却をはかるため、同社は徐々にものづくりの幅を広げていった。そして多くの人たちに同社の存在を知ってもらうため、町工場でもどんどん情報発信を行って地域を活気づけたいと、2021年11月に会社公式のInstagramを始めた。

会社公式のInstagramを始める

「深く考えて投稿しているわけではない」(徳永社長)と言うが、投稿は意外な人々の興味を惹きつけることになった。木工職人・電気工事士とさまざまな経験を積んだ若者をはじめ、幅広い人々が集まってきた。コロナ禍に墨田区へ寄贈したアルコール消毒スタンドの写真をInstagramに投稿すると、それを見たラッパーからオリジナルのアルコールスタンドの製造依頼が舞い込んだ。さらに、ものづくりや日本と墨田の文化が大好きで、それを守ることに意欲的な元力士、大関・小錦^{やそち}八十吉さん、現在はタレントのKONISHIKIさ



①2024年4月に入社した22歳の女性社員もTIG溶接を行う／②工程進捗を確認するために、各工程のリーダーが1日2回以上集まって開催される工程会議／③下水に油脂分が直接流れ込んだりするのを阻止するグリーストラップ

んからも Instagram を通じて連絡を受け、来日40周年記念品の製造、バーベキューグリルの共同開発を行うようになった。

直近では、HIP HOP 50周年ドキュメンタリー映画「ONE UNITY」で使用されるDJブースの製作依頼を請けた。同社の金属加工技術、木工職人・電気工事士などの別の仕事を経験してから入社した若手従業員の木工や電気工事の技術に、徳永社長のラッパー、DJとしての経験を組み合わせることで完成したという。

自社ブランド「カナサカ-KANASAKA-」

さらに2022年10月からはこれまで培ってきた金属加工技術によるオーダーメイドの厨房機器などの製造技術を生かした自社ブランド「カナサカ-KANASAKA-」をスタートした。

「町工場の職人たちが受け継いできた技術に、新しい技術がかけ合わさり、この先もずっと伝えていきたい、そんな思いを込め、大切な方への贈り物など、使う人の表情を思い浮かべながら、作品を一つひとつ丁寧に製作しています」（徳永社長）という。マルチトレイ、箸置き、コースター、カトラリーレストなど食卓などに置かれる作品が多い。

「カナサカ」の名称には「町工場の職人たちが受け継いできた技術に、新しい技術がかけ合わさり、この先もずっと伝えていきたい」という願いが込められており、墨田区内にある設計事務所studio ai architects東京事務所の塚原信行代表のアドバイスを受けてブランドを誕生させた。

「墨田区には、塚原さんのように傑出した才能を持つ人がたくさんいます。町工場の職人による皮革の加工技術も世界トップクラスです。そんな技術とデザインをかけ合わせた拠点をこの町に設けたい。現在は、当社で最初に建てた工場の建て替えを計画中です。2025年建設の目標で、地域の人たちと協働し、栄えることができる交流拠点としても活用できる工場にしたいと計画しています」（徳永社長）。

経営理念である「『墨田のものづくり』、魅せる伝統技術を地域社会と共に、協存の心で未来へと物語を繋ぐ」を実現させようとしている。

社員の平均年齢は35歳

役員を除く20名の社員の平均年齢は35歳で若い社員が多い。たとえば3次元ソリッド板金CAD SheetWorksを巧みに操作し、3次元モデル作成からバラシ、展開、その後のCAM割付まで担当する2名の女性社員はCADの専門学校を卒業しており、3次元CADの操作に精通。同社へ入社した後は板金加工技術を習得し、板金属性による展開の難しさを学び、現在はサクサクと仕事をこなしている。

徳永社長の就任後に入社した従業員の中にはInstagramを見て入社した、工業系やデザイン系を学んだ人材も多く、彼女たちもそうした経緯で入社している。また、生産管理システムも外部のソフトハウスの協力もあったが、社内でも立ち上げたオリジナルバージョン。タブレット端末で生産のスケジュール管理から工程ごとの進捗、実績情報を一括管理する。

リアルな生産状況を目と耳で確認

一方で、午前・午後には社長、専務、営業担当、現場リーダーが工場1階に設置されているホワイトボードの前に集まって工程会議を開催。この場で生産計画に対する進捗を確認するとともに、特急・割込み情報を確認し、進捗が遅延している工程に対する応援対応なども討議、リーダーを通じて全社員が生産状況を確認している。デジタルだけに頼るのではなく、社員同士が話し合うことも大切にしている。

「大きなライオンが自分たちの師匠、小ライオンが自分たち。大きなライオンの壁を乗り越えろという意味を込めて描いてもらった」と絵の前でポーズする徳永社長には温かみが溢れていた。